

# 寸 胴

THE GIFU UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

第9号 1993.2

## 目 次

電算化と資料保存—新たな課題(梶山雅史)	1
書庫の本に思いをめぐらせて(瀬戸崎康子)	3
先端技術、書物そして図書館(上岡宏彰)	5
教官推薦図書	
気象と言語(松本博之)	7
演習を通じて理論を学ぶ(川村道彦)	7

1993年度購入雑誌変更リスト	8
図書館員から一言 溝口 敏博	10
内海 春代	10
人事移動	10
お知らせ	10

## 電算化と資料保存 — 新たな課題 —

梶 山 雅 史

1987年に、学術情報センター文献情報サービスが開始されて以来、全国的に図書館の情報図書館化さらに電子図書館化への動きが、急速な展開を見せている。

学術情報センターの目録システムと昨年4月から稼働したILL(図書館間相互貸借)システムによって、大学図書館の情報環境は、まさに大きく変化しつつある。

本学の附属図書館においては、いちはやく1975年4月に、館員の積極的取組によって電算化研究グループが発足した。1980年にパソコンを導入し、図書・雑誌受入れシステムを開発するとともに、JOIS(日本科学技術情報センター)等の文献検索サービスの利用を進めてきた。さらに1984年に情報処理センターの汎用電算機によって、閲覧・目録検索システムを開発し、図書・雑誌の受入データの蓄積と遡及入力に努めてきた。

1992年2月、専用電算機を導入し、図書35万

冊、雑誌1万2千種の目録情報さらに4千7百種の雑誌新着情報が、館内利用者端末ならびに研究室端末にオンライン目録として利用できる段階に至っている。

学術情報センターの情報検索サービス、目録所在情報サービス、電子メールサービスを利用する一方、本図書館から受入れ図書・雑誌を学術情報センターにすでに所在登録している実績から明らかなように、本館スタッフが積み重ねてきた努力とその力量は、大いに賞賛されてしかるべきである。極めて乏しい財源にもかかわらず、学内の研究者の強力な支援、館員の熱意と尽力が結実させた図書館業務の電算化度は、国立大学間にあってかなり高い水準を示しているといえよう。

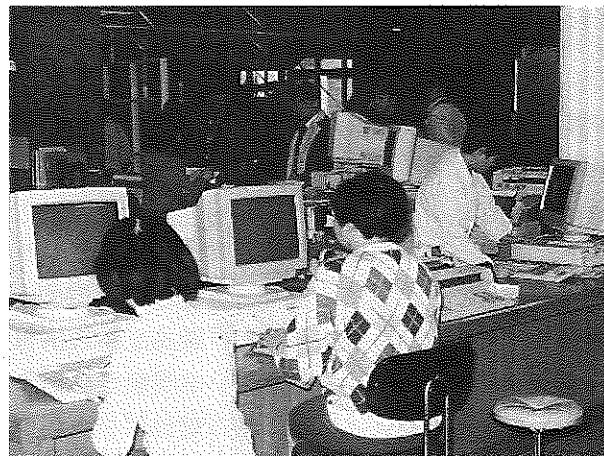
1988年度、89年度と附属図書館委員を努め、この度、新館長に就任して上記の経緯に思いをはせる時、実際に心打たれるものがある。大学統合移転とともになう図書館移転の膨大な仕事に忙殺され続

けたなか、手さぐりで電算化の研究・研鑽を積み重ね、今日の水準を達成するに至ったことに、心から拍手を送りたい。

情報図書館としての機能は、今後、高速ファクシミリの活用、多種の CD-ROM ならびに CD サーバの装備・拡充、また視聴覚資料・設備の充実によって、相当の威力が期待できるところにさしかかっている。その威力、機能を發揮させ、教育・研究への支援要請に十全に応えるためにこそ、学術情報担当の専門職員を参考調査係に増強すること、このスタッフ増員が、目下、緊急不可欠の課題となっている。

さらに学内 LAN (Local Area Network) 計画の早急な策定と実現によって、情報図書館としての高度な機能を開花させ、軌道に乗せることを迫られている。全学の熱い支援と予算措置をお願い致したい。思いや切である。

なお、通信速度のネックを開くため、附属図書館と情報処理センター間を光ファイバーで実験的に接続することになった。情報検索速度は格段に向ふことになる。大いに活用していただきたい。



以上、情報図書館機能について、その達成状況と課題について触れてきたのであるが、実は、今日、さらにまた古くて新しい深刻な課題に直面している。

高度な情報検索システムを駆使して捜し当てた文献資料、利用したい現物そのものが、果たしていかなる保存状態にあるか、本 자체、資料自体の保存状況、その実態と問題点が、国内外の図書館界においてあらためて問い合わせられている。

1959年アメリカにおいて、ウィリアム・バロー (W.J.Barrow) の調査報告書『本の劣化、原因と対処』が刊行されて以来、近代製紙法による「酸性紙の劣化問題」がクローズアップされるに至った。わが国においては、1982年に金谷博雄氏の『本を残す — 用紙の酸性問題資料集』が登場して以来、図書館界で資料保存の問題が注目されはじめた。一般的には、1982年11月27日の「朝日新聞」夕刊、「百年後、本はボロボロ」等の記事が、『酸性紙による図書の劣化=酸性紙問題』を取り上げ、大きな波紋をよびおこしたことを記憶されている方も多いのではないか。

19世紀半ば以降の近代的な製紙法でつくられた洋紙は、製造過程でサイズ剤（インクのにじみ止め）の定着に硫酸アルミニウムを添加しており、時間の経過とともに、紙や空気中のわずかな水分によって硫酸が遊離し、紙の纖維（セルロース）が酸加水分解という化学反応で切断されてゆくのである。“酸が原因で年月が経つと紙は触っただけでボロボロに崩れしていく”。木材パルプを原料とする近代製紙法による本は、50年、100年で自壊する。紙には物理的な寿命があり、“本に寿命がある”という深刻な現実は、図書館界のみならずまことに強い衝撃であった。

二宮嘉寿彦氏が唱えるごとく、「保管しておくこと」が、そのまま「保存しておくこと」につながらない事態にある。積極的資料保存への手立てを打たなければ、図書館は重要な機能を喪失する。

1983年に国立国会図書館に酸性紙対策班が設けられ、図書資料の劣化状況の調査が開始された。すでに先進的図書館での「酸性問題」への取り組みが種々報告されつつある。“脱酸技術の開発”のみならず、温度、湿度、紫外線、大気中の酸化物など多くの酸性化要因への対処がなされるべきこと、そして“修復作業”的重要性が図書館の活動の中に正しく位置づけられなければならないこと、さらには劣化資料のマイクロ化など他の媒体への移し換え等々、劣化の防止対策を講じ、書庫の環境条件を改善することが緊急に必要であるとの議論が高まりつつある。

昨年11月に、国立国会図書館から公立図書館、大学図書館に対して、「日本における図書館資料



「保存の実態調査」さらに、国立大学図書館協議会から「保存図書館に関するアンケート調査」があいついで行われた。書庫環境、資料収蔵スペース、空調機、除湿機の稼働状況、虫、黴、塵、埃などの害とその対策、補修・製本経費、処理実績、マイクロ化計画等々、その調査項目に照らして、本学においても、いまや資料保存問題に正面から取り組むことを迫られている。

膨大な学術雑誌、図書資料の増加によって、数年をまたずして本図書館の収蔵容量は限界に達する。この点からも、何をどのように保存するのか、その対策の検討という深刻な課題が実は目前に迫っている。

残念ながら本附属図書館は、保存図書館としての機能においては、実に立ち遅れていること、その実態をまずは率直に認識することからはじめねばなるまい。この一月、図書館内に「資料保存検討委員会」をいよいよ発足させるに至った。

本館の資料保存環境の点検から着手し、資料保存に関する基本的センス・知見・技倅を培うために、積極的に研修機会の増大にも努めたい。本学図書館蔵書中、劣化の激しいものを調査し、修復、マイクロ化する予算措置が不可欠となる。

自明のことながら、図書館には先人から受け継いだ文化を未来に伝えていく使命がある。「現在と未来の使用を出来るかぎり保証すること」を任務とする限り、資料を利用する人々が遠い将来にわたって無限に存在することに深く思いを及ぼさねばならない。大学図書館として、資料保存機能の抜本的改革に取り組むべき時点にさしかかっている。全学的理解と支援をこれまた、心からお願

い致したい。

電算化と資料保存、この両方向への大きな課題を前にして、やはり、当然のことながら、本学図書館の蔵書内容、その質こそがあらためて問われることになる。貴重な図書、有用な資料がいかほど蓄えられてきたか。図書館の内実、特質、今後の集書計画におよぶ検討事項が浮上してくるにちがいない。

なお、付言しておくならば、案外盲点となりやすいのであるが、本学に独自の資料として保存すべきものに、本学キャンパスから発信されるあらゆる刊行物を挙げておかねばならない。将来、大学アーカイブスに収蔵されるべき原資料として、すくなくとも図書館は、創刊号から本学の表現物を細大洩らさず系統的に保存・完備する任務がある。それらは長い年月のなかで、本学のその都度の歩みを語り、自己証明、自己確認をなす掛替のない貴重な資料となるからだ。

理科系、実学系の学部が多数を占める本学の沿革、学部構成が生み出したひとつの精神風土、「古い文献は無価値である」とする文献観に対して、Universityを志向するかぎり、やはり、図書館の蔵書構成・収蔵資料の吟味、基本図書の抜本的な充実が迫られていると感じてならない。

「あらゆる分野と年代にわたる、研究者の個別の資料要求に応えるのが研究図書館としての大学図書館の機能」であるという原則をふりかざすのは、いまさらながら口恥ずかしいことではあるが、「図書館が諸学問の心臓である」ことを深く心に刻みたい。学生が図書館に入って、少なくとも、自分は確かに大学にきたのだと感じることの出来る文化の手応え、古今東西の知的遺産への回廊としての内実を備えるものであってほしい。学部一貫教育体制に突入していく大学の様がわりに際して、なおさら、ゆったりと想いをくゆらせる精神の浮遊空間が、このキャンパスに不可欠ではあるまいか。思いはいつも、まことに素朴きわまりない原初的な感概へとたちもどってゆく。

(かじやま まさふみ：附属図書館長)

## 書庫の本に思いをめぐらせて

瀬戸崎 康子

平成4年4月に医療技術短期大学部に赴任して来て以来、正直な所を申し上げれば、柳戸地区と司地区の図書館にそれぞれ1度だけしか、足を運んだことがない。それぞれの図書館に不満があり、行くのを拒否しているというのではなく、これは私自身の私的な理由からである。つまり、我が専門分野である英文学の図書が司地区の図書館には見あたらず、医学関係の図書にしほられているからである。このことは医学と分野を異にする研究者にとっては、柳戸まで行かなければならぬ不便さを大いに感じている次第である。自分の車を所有しない者にとっては、「ちょっと図書館まで」といった気楽な気分にはなかなかなれず「半日仕事になるな……」という重圧感が、まず先に立ち、つい足が遠のいてしまうのである。「是が非でも図書館に行かなければならない」という悲壮感に支配されるまで、容易に身体が動いてくれないのである。私の場合、この地理的条件が前面に大きく立ちはだかり、図書館利用に関して消極的になってしまっているのが現状である。

図書館は大学のシンボルであり、蔵書の量・その内容・新しい機能を備えたコンピューターなどの機械類、またそれらの利用状況で、その大学の質や学生の学問に対する意欲・レベルなどを一目のうちに捕らえることができると言われている。幸いにも岐阜大学の図書館は、キャンパスの真ん中に位置しており、どの学部からもほぼ均等の距離を有しているので、学生たちにとってはとても便利である。そこからはキャンパスの計画的配置を伺い知ることができるし、またそれ以上に、それは図書館にとっても、大学にとっても、重要なことである。

しかし、少々個人的印象を述べることを許してもらいたいのであるが、図書館の入口がわかりづらく、どこから入ったらよいのかと建物を眺め回してしまった。図書館の入口前のホールと階段に

より広いスペースがあてがわれ、現代建築によくある様な、ガラス張りで、外から中が見え、自然と足が向いてしまう様な吸引力を感じせしめ、更にそこに解放感が漂っていればもっと良かったであろうなどと勝手ながら思っている。

しかし一度図書館の中に入り、自分の勉強に関する本や興味のある本を探し、それらを借り、読み、再び返却するという一連の行為を続けることによって、次々と新しい興味が沸き起こり、勉強意欲もそれに伴って自然に増加してゆくであろうと確信している。こういった常なる行動のサイクルを身に付けることが大切だと思われる。この意味で、図書館の前を素通りしかしない学生たちにも、「一度何の目的もなくてよいから、本の間を歩き回るのもいいもんだよ！」と勧めてみたい。また「本に囲まれて、何も考えずにぼんやりすることも、一つの精神的解放であるかもしれないよ！」と教えてあげたい。このように、たとえ図書館で熱心に本と向き合っている学生でなくとも、ただそうするだけでも、そのこと自体が無駄な行為でないことを告げたい。つまり、本に囲まれ、一種特有の雰囲気の中で静寂を感じながら時を過ごしているうちに、その学生の目と手がいつしか本に向けられていくのが判っているからである。と言うわけで、一人でも多くの学生が、まず図書館に足を踏み入れることを望んでいる。そこには限りなく広がる未知の世界があり、知識の量を増やすだけではなく、心の豊かさをももたらしてくれる機会を見いだすチャンスになるかもしれないからである。私たちが、人間に於いて何が一番大切であるかと考える時、勿論断定することはできないが、教育であろう。生まれながらに持つ個々の良い資質を伸ばすのも教育であれば、良くない資質を改善するも教育である。しかし、それを受けとめる学生一人ひとりの心がまえが、一番大きな問題である。伸びるのも伸びないのも、個

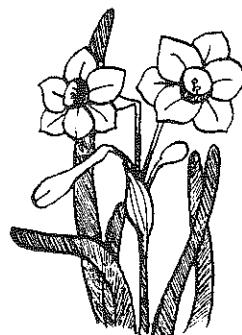
人の気持ち次第である。教育から得た知識を基礎にし、鋭い洞察力や正確な判断力や幅広い理解力や安定した情緒や豊かな心や、列挙すればきりがないほど多くのものを得ることができる。そういった底の深い人間味を得るには、経験は勿論のこと教育を通じてめぐり合った数々の本のページの中からではないだろうか。そしてこれこそが人間の財産であり、誰からも奪われることがなく、火事になっても、海に放り出されても、決して失うことがない真なる財産であろう。

図書館には、それぞれの作家・著者たちが魂を注ぎ込んで書き上げた本がずらりと並んでいる。そのそれぞれの作家・著者の魂の声を聞く時、單なる紙切れの集まりが大きな意味を持ち、読者の

心を打ち、蘇ってくるのがわかるのではなかろうか。そういう心の交歓を、知識を得ながら繰り返すことにより、何かしら充実し、成長し、一皮むけた自分の精神と心に、驚きの目をもって気づく時があるのではないだろうか。そしてその時、心の目に映るのは図書館の書庫の本棚ではないだろうか。図書館とは本当に有り難いものであり、皆の共有の財産である。そこから得られるものは、限りがない。

そろそろ私の岐阜一年目も終わりに近づき、柳戸までの往復にチャレンジしてみようかな、との頃思ったりしている次第である。

(せとざき やすこ：医療技術短期大学部助教授)



## 先端技術、書物そして図書館

上岡 宏彰

手掛けている仕事に関連する文献が必要になった。かなり古い文献であるが重要な意味をもつようである。岐阜大学学術雑誌目録、欧文編を繰って探すと図書館に所蔵となっている。早速図書館の積層書庫へ向かった。ここは、閲覧室でも時折耳にする私語もなく静かである。目指す文献は分厚く製本装丁されて棚に整列していた。手に取って見ると、目当ての文献は予想どおり意味深いものだった。ついでに、分厚い冊子をぱらぱらと繰ると、思いがけず興味ある内容の文献が目にとまった。ついつい、これに関わる文献探しにのめり込む。道草が始まった。

高温超伝導体の発見は、近年の科学技術分野で大いに関心を集めた話題であったので、その顛末をご存じの人も多かろう。事の始まりは7年前の

1986年、超伝導現象の分野でそれまでに考えられていた臨界温度よりもずっと高い温度で、ある種の銅系酸化物物質に超伝導性を有する可能性があるという、ミュラーとベドノルツによる提言であった。これに着目したヒューストン大学のポール・チューは追試検討の結果、短期間ながら臨界温度73Kというミュラーらの提言した物質の臨界温度より高い、高温超伝導物質を発見する。この結果を発表した1987年3月のアメリカ物理学会は、徹夜の討論にまで発展する始末となった。同年開催された日本物理学会でも、関連セッションに人があふれ、深夜に及ぶ発表討論であった事は記憶に新しい。

この異常ともいえる興奮をもたらした高温超伝導体の発見より発表に至る成り行きは、チューの

研究協力者による著書『科学が発展する瞬間』(ロバート・ヘイゼン著、西岡幸一訳、HBJ出版局)に日記の形態をとつて克明に書かれている。文面から一刻を競つて先陣争いする様が伝わってくる。この展開を見るとき、知識情報の伝達の速さが、さきがけを競う科学技術の分野では重要な役割を果たすことを今更ながら強く感じる。

科学技術と情報との関わりを示す一例として、高温超伝導体発見の経緯を引き合いに出した。しかしこれに限らず、科学技術分野で知識情報の伝播の速さがもつ重要性は変わりがない。取り分け先端(科学)技術といわれる分野では、他へ及ぼすその波及効果も加わり、伝播の速さの重要性はことさらである。

技術という面に目を据えて、今日の我々社会の活動を支えている技術について考えてみる。技術を示す膨大な数の語句があり、それらの間の関連性をどう位置付けるかは、多くの立場があろう。ある技術解説の本によると、まず基本的なものとして、マイクロエレクトロニクス、バイオテクノロジーが、応用的なものとして、メカトロニクス、エネルギー・システム、情報・通信、航空・宇宙があげられ、これらの技術の鍵となる技術が、先端材料となる。ここにあげた数多くの技術分野の間で、いかにも多くの知識情報が複雑に交差し、目まぐるしくかつ 急に飛び交うことかは想像に難くない。

知識情報を取り扱う機関といえば、図書館の存在があげられる。寸時を競う情報伝達時代における図書館の存在に思いを巡らせてみる。

こうなると、日ごろ無頓着であった「図書館」とは何かを知りたくなる。広辞苑によると図書館とは、『図書・記録その他の資料を収集保管し、公衆の閲覧に供する機関』とある。

図書館の定義の中に現れる『図書』の意味合いを、再度広辞苑に求めてみた。『易經』(繫辭伝・上)を出典とする『河図洛書』に由来し、その略

であること、さらに本、書籍、書物はいずれも実際上の意味は同じであることが分かる。図書を扱う立場では、もう少し限定された定義が必要らしく、ユネスコの定義では『思想・知識・感情・情報などを他の人に伝達するため、紙などに筆写、または印刷し、一定の厚さに製本したもの』と具体性をもたせている。

かくして図書館とは、図書及びそれ以外の資料(非図書資料)を提供する機関となる。

実際上の図書館の機能と役割は、本質論とはいえないまでも時代と共に大きく変化している。技術革新の波は図書館の変貌をも余儀なくさせている。ニューメディアといわれる電子出版、光ディスク、CD-ROMなどの出現や、コンピュータによる管理システムなどは、図書館関連の革新技術であるが、今後は科学技術の発展に関連した最新情報の迅速なる提供が、ますます要望されることになろう。そのため、この種の情報サービスの分野にかける図書館のウエイトも、急速に大きくならざるを得ない。

しかしながら翻って考えるとき、この種の情報サービスは図書館の仕事の一部に止めるべき性質のものなのかもしれない。ここであげた情報サービスの対象となる知識情報は、同時代的なそれである。一方、過去から現代に至る知識情報の記録、つまり歴史的なそれを提供するのも、図書館業務の重要な任務であったはずである。

古きを尋ねて新しきを知るとは、先人の言った言葉である。古い物は古いと言いきれるものではなく、その中に新しい芽を含んでいる可能性がある。こう考えるとき、歴史的情報を保有する図書館は、「温故知新」の古里といえる。

とかく変転激しく急がしい世の中。そんな中で、冒頭にふれたような道草の場を与えてくれるもの、図書館の効用の一つと言えないだろうか。

(かみおか ひろあき：工学部教授)



## 教官推薦図書

教官から、その専門分野を専攻しようとする学生に先ず薦めたい入門書・基本図書、あるいは、より多くの教官・学生に教養書として是非一読を薦めたい図書を紹介していただいている。

### 気 象 と 言 語

松 本 博 之

英語の house は今日 [ハウス] と発音するが、16世紀頃までは [フース] と発音していた。この発音上の変化を大母韻推移と呼んでいる。専門的に云えば、長母韻が二重母韻化したのである。なぜこのような音韻変化が生じたのか諸説はあるが、決定的な説は未だない。

科学は人間の「なぜ」という単純な問いを解明してきたが、未解決の「なぜ」は未だ我々の周囲に数多くある。問題はその「なぜ」を執拗に追求するか否かである。ここに学問・研究の存在理由がある。このようにして明らかになった真実が一つ一つ積み重ねられて体系化され学問となった。しかし近年、従来の学問領域では把えきれない問題が出て来ている。というより本来学問領域を設定する方が間違っていたのかもしれない。領域を

設定することで細部に入り込むことによって全体とのバランスを見失うという誤ちを犯さないとも限らない。このようなことを思っていた頃『気候の変化が言葉をかえた：言語年代学によるアプローチ』 鈴木秀夫著 (NHKブックス) を知った。本書がユニークであるのは、単に気候変化と言語変化を関連づけて謂わば学際的に扱っただけでなく、思考のスパンを何百年、何千年という単位に拡大している点である。言語の通時的研究がこのような巨視的観点からなされれば、冒頭の「フース」→「ハウス」の変化も新たに説明されるかもしれない。いずれにしろ本書は我々の日常の思考パターンを切り換えてくれるほど刺激的である。

(まつもと ひろゆき：教養部教授)

### 演習を通じて理論を学ぶ

川 村 道 彦

大学の理工科系1、2年生で学ぶ数学に、微分積分、統いて微分方程式がある。この分野は歴史も古く教科書も夥しく発行されている。微分方程式論と銘打ってある理論主体の専門書は別にしても、基本的な定理を述べて解法、応用に力をいれて書かれている本も多い。これらの本の場合、読者には定理の部分がなんとなく異質に感じられ敬遠されていることが多いようにも思われる。数学では講義の理論を受講して演習によって理解を深めるのが順序のようである。しかし、実際はある程度計算に習熟してから理論を勉強しなおす場合が多いと思われる。そこで、演習しながら理論が理解できるような本はないだろうか。

昨年発行の‘中井三留著：微分方程式の解き方（学術図書出版社）’はこの様な好書であると思

い推薦したい。この本は、その題名通り常微分方程式の解き方を中心にして書かれているが、例えば、普通は基礎理論に相当するピカールの逐次近似法を近似解法としての観点から丁寧に解説しており計算しながら、一意存在定理としての認識に至る様になっている。一般に、数学で理解しにくいのは理論ばかりとは限らない。数式の変形についても同じである。本書は級数解法のところでも様々な工夫がなされている。また、これに関連する応用上重要な特殊方程式の解についても、有名な結果や公式の单なる羅列ではなく、途中の面倒な計算も省かず書かれており、類書に比べてぐっと読み易く成っている。著者の長年月に亘る研究教育の経験が生かされた読者の立場に立って書かれた好書であると思う。(かわむら みちひこ：教育学部教授)

## 1993年購入雑誌変更リスト

## &lt;新規購入雑誌&gt;

誌名	配架	誌名	配架
IYDP情報	図教育	伝承文学研究	教国語
Japanese journal of sports sciences	医短体	飛ぶ教室	教国語
Journal of clinical rehabilitation	医短図	日経パソコン	医短図
Sportsmedicine	医短体	日本救急医学会雑誌	病救急
明日の食品産業	農農営	日本史研究	教法経
英語青年	教英語	日本食品工業学会誌	農流通
英語青年	医短外	日本歴史	教法経
化学と薬学の教室	病薬剤	発達障害研究	図教育
看護教育	医短基	文化庁月報	図総記
看護研究	"	ホルモンと臨床	医内3
季刊地理学	養地理	薬局	病薬剤
季刊特殊教育	図教育	酪農ジャーナル	農農営
季刊日本思想史	教法経	レヴィアサン	教法経
クリニカルファーマシー	病薬剤	Acta endocrinologica	医内3
軍記と語り物	教国語	Advances in mathematical sciences and application(jpn)	工共通
月刊切り抜き:体育・スポーツ	養保体	Agricultural systems	農農営
月刊切り抜き:保健	養保体	AI & society	養科学
月刊状況と主体	教法経	Behavioral ecology and sociobiology	教生物
月刊実践障害児教育	図教育	Biology & philosophy	養科学
月刊トレーニングジャーナル	医短体	British journal of visual impairment	図教育
月刊福祉	図教育	Clinical vision sciences	図教育
月刊薬事	病薬剤	Clinics in dermatology	医皮膚
産科と婦人科	医短母	Current eye research	医眼科
史学雑誌	教法経	Eighteenthcentury studies	医短外
思想	教法経	European journal of dermatology	医皮膚
周産期医学	医短基	Experimental dermatology	医皮膚
周産期医学	医短母	Eye	医眼科
障害者問題研究	図教育	Flow measurement and instrumentation	工機械
食品衛生研究	農獣公	Francis bulletin signaletique. 523	養仏語
詞林	教国語	Geotechnical and geological engineering	図土木
スポーツイベント:ハンドボール	養保体	International journal of geographical information systems	図土木
総合リハビリテーション	図教育	International journal of mathematics	教数学
素粒子論研究	工共通	Journal of the American college of cardiology	医分館
食べもの通信	教家政		
地理科学	養地理		

誌名	配架	誌名	配架
Journal of low frequency noise & vibration	医衛生	Applied scientific research	図理工
Journal of microelectromechanical systems(IEEE set)	図電気	Astrophysics	工共通
Journal of teacher education	教教育	Chemtech	図化学
Journal of vision rehabilitation	図教育	Clinical science	医内 1
Midwifery	医短基	Composites science and technology	図繊維
Mitteilungen des Instituts fur Osterreichische Geschichtsforschung	養独語	Current microbiology	医微生
Le Monde, Selection hebdomadaire	養仏語	Developmental neuroscience	図畜産
Nineteenthcentury literature	医短外	ENR	図理工
Pflugers archiv : European journal…	図畜産	European journal of clinical microbiology & infectious diseases	医微生
Shakespeare quarterly	医短外	European journal of combinatorics	養数学
SIAM journal on mathematical analysis	工共通	FEMS microbiology letters	医微生
Skull base surgery	医脳外	Geometry	教数学
Systems & control letters	工電子	Glass technology	図化学
TESOL journal (TESOL quarterly.set)	教英語	Heat transfer Soviet research	図機械
TESOL journal (TESOL quarterly.set)	養英語	Journal of combinatorial theory.A	養数学
Twentieth century literature	医短外	Journal of general psychology	図哲学
Women's studies quarterly	教教育	Journal of genetic psychology	図哲学
Zeitschrift der savigny — Stiftung …	養独語	Journal of macromolecular science. B	図繊維
 〈購入中止〉			
ICU と CCU	病救急	Journal of macromolecular science. C	図繊維
Rostria	農昆虫	Journal of cellular plastics	図繊維
応用物理	図物理	Kunststoffe	図繊維
化繊月報	図繊維	Mechanical engineering	図機械
健康管理	医衛生	Modern plastics international	図繊維
現代思想	教哲学	Okajimas folia anatomica japonica	図繊維
資源テクノロジー	図理工	Pain	医麻醉
自動車技術	図機械	PCI journal	図土木
生活衛生	医衛生	Physics and chemistry of glasses	図化学
日本エネルギー学会誌	図化学	Polymerplastics technology and engineering	図繊維
日本化学会誌	図化学	Quarterly journal of engineering geology	図土木
日本物理学会誌	図物理	Revue francaise de pedagogie	教教育
表面技術	工高分	Tekstilnaia promyshlennost	図繊維
ファインセラミックス	図化学	Water services	図農工
労働法律旬報	養法学	World textile abstracts	図二次
Acta polymerica	図繊維	〈休刊誌〉	
American journal of human genetics	医小児	あも	病看学
American dyestuff reporter	図化学	繊維工業雑誌	図繊維
		肺と心	医分館

## 図書館員から一言

### 溝口 敏博

平成4年4月二度目図書館に配置換、岐阜大学最後の勤務場所で、昔懐かしい係長さん方々と仕事をして早1年近くになりました。当時は紙テープを使った電算化の時代から14年過ぎた今日専用電算機が入ったが、資料は溢れつつ……情報の保存基地としての役割が果たせるかな少々心配している。将来は電子出版の時代CD-ROMやICカードの電子媒体の発達で電子図書館ネットワークになるだろう。情報化時代に対応できるよう全学の理解と協力をお願いします。

(みぞぐち としひろ:事務長)



### 内海 春代

岐阜に来て丸5年。雑誌整理全般(発注準備から受入・製本・目録まで)を担当しています。

“継続”という性格を持つ資料群には変化はつきものですが、その変化に対する情報をつかみきれていません。一方電算機の応答時間の長さに受付もはからず、利用者の皆様にはご迷惑をおかけして申し訳ありません。

的確な資料を迅速に整備することに、一層の努力をしていきますので、皆様の思いやりのある叱咤激励を期待しています。(うつみ はるよ:整理第一係)



## 人 事

(新任)

11. 1 附属図書館長 梶山雅史(教育学部教授)

## 異 動 平成4年5月~12月

(退任)

10. 31 附属図書館長 大谷 熱(医学部教授)

## お 知 ら せ

### ビデオ資料について

附属図書館では、映画ビデオ(語学練習), 放送大学ビデオ教材を始め、各種のビデオソフトを備えておりますので、利用希望の方は、閲覧

係に申し込みください。

なお、スポーツビデオが近々入荷します。

## 休館日のご案内

平成5年6月末日まで

次のように休館日を予定しています。

- 毎月第二火曜日

- 3月の土曜日

- 4月3日(土), 4月10日(土)

附属図書館では次の日も休館日となります。

- 3月12日(金)個別学力試験の日

- 3月25日(木)卒業式・学位記授与式の日

- 4月7日(水)入学式の日

次のように夜間開館停止を予定しています。

- 附属図書館 3月1日~4月9日

\*図書館内の案内・掲示に注意してください。

岐阜大学附属図書館報「寸胴」第9号 1993年2月27日

編 集

委員長:梶山雅史 委員:堀田剛吉, 安岡 忠, 宇野尚雄, 溝口敏博,  
中齋二三博, 村上喜廣

発 行

岐 阜 大 学 附 属 図 書 館

〒501-11 岐阜市柳戸1番1 ☎0582-30-1111